



あなたのそばに人権相談員がいます!!

発行人 牧坂秀敏・小宮 豊

人権プラザ便り [結い]

(公財)東京都人権啓発センター 〒111-0023 台東区橋場1-1-6 TEL.03-5808-9682 (直通)

**人権相談は、圧倒的に女性が多い。
さまざまな問題を抱えて生きる人たちの支えに。**

「私の人権問題です！」
と憤る訴えに…



開口一番、「私の人権問題なんですけど、ここではどういう人権を扱っているんですか？」と聞かれます。「いえ、人権問題はいろいろありますから、どんなことでも話してみてください」と促すと、話し始めました。

昨年夏、連れ合いが脳内出血で病院に救急搬送されました。言語障害は残りましたが、会話は出来る状態で、容態も安定してきたということで、1カ月後には一般病院へ転院します。相談者は、連れ合いとは入籍していませんでしたが、結婚の意思を固めます。

連れ合いの親族は、二人の結婚を喜ぶどころか、猛反対します。そんななかで、二人はお互いに結婚することを確認し合い、入籍しました。

ところが、まったく予期しないことが起きます。回復に向かうかと思っていた連れ合いの容態が急変しました。二度目の脳内出血が起きて、意識不明になります。その際、通常、妻である相談者に病院から直接連絡が入るところです。しかし、その知らせを受けたのは病院からではなく、親族からでした。さらに追い打ちをかけます。意識不明ともなれば、当然のことながら、今後の治療方針について病院側と協議することになりますが、これも相談者はまったく蚊帳の外におかれました。

「万事がそうなんです。病院の方にも、ちゃんと入籍した旨を伝えていますが。妻である私が患者のキーパーソンのはずなのに、まったく無視されています」と憤るのです。

さらに、「(親族から) 延命治療はしないと申し出られています」と看護師から聞きました。親族に確認したところ、「見るにしのびないので、延命治療は断った」というわけです。

「本人は延命治療を拒否するということはまったく言っていない。一日でも長く生きたいと言っていた。私としては、延命治療をしてほしい」と相談者は訴えます。

彼女は、医者との話し合いの場を求めました。「私が知らないこともあるので、直接医者に聞きたいんです」。その日を間近にしての相談でした。

病院の対応については、私も実際に同じような経験をしたことがありますので、「どこの病院も変わらないな」と実感しました。どんなに身近な人であろうと、親族でない者が患者の病状説明を求めても「どんな関係ですか。親族でなければ話せません」と拒否し、何十年も疎遠で患者との関係がうまくいっていなくても、親族でさえあればいいのです。「親族を呼んでください」の一点張り。病院側としては、最初に親族をキーパーソンとして患者サイドの窓口と位置づけ、それを踏襲してきたと思われま。

だから、相談者の憤りは当然のことです。その憤りをどこにぶつけたらいいのか。一人で悶々としていたとき、たまたま、病院で目にした冊子で人権啓発センターの人権相談窓口を知り、電話をしてきたのです。

ここは、医者との話し合いの場をいかに有意義なものにしていくかにかかっています。

連れ合いの置かれている状況は予断を許さない段階に入っています。事前に、話し合いの場で、聞きたいこと、確認したいこと、自分がいべき

ことを整理して箇条書きにしたものをもっていくようにしたほうがいいとアドバイス。

考えられることとしては、まず、現在の病状がどういう状態なのか。実際にどういう治療が行われているのか。今後予想される事態はどういうことが考えられるのか。その際、どのような治療方法（選択肢）があるのか。延命治療としてはどういふものがあるのか。その期間はどのよう判断で行うのか。等々。どちらにしても、後悔しないように本人の意を汲んでやるしかありません。

相談は一時間近く経っていました。最後にいわれたのは、「もやもやしていたのが、すっきりしました。ありがとうございます」の言葉でした。

骨粗しょう症で激痛、寝たきりになるのでは？



骨粗しょう症の母親が「腰が痛くて、動けない」と訴えて、ベッドから起き上がらない日が続いています。娘夫婦は、このまま動かないと寝たきりになるのではないかと心配でなりません。どうし

たらいいのか、相談がありました。

詳しく聞いてみると、朝は痛くて起き上がれず、朝飯抜きで昼ごろまで寝ている状態です。その後起き上がって、座ることはできます。病院でレントゲンを撮っても異常は見当たらず、処方された痛み止めで凌いでいるのが現状です。

ひごろの生活ぶりを聞くと、身の回りのことは自分でやっているの、やはり、激痛が原因でいままでもおりの生活ができなくなっていると思われま。とりあえずは、安静が第一。直接、娘夫婦が次回の受診時に母親に付き添って、主治医に激痛の原因や対応などについて詳しく聞いてみることだとアドバイス。寝たきりになることを心配することよりも、今は激痛に耐えている母親を支え、温かく見守ることが先決です。

骨粗しょう症について調べてみると、強い外力がなくても骨折が起きます。折れていてもX線に写らないこともあるそうです。もっとも、痛みが強く、良くなならないときには癌の骨転移などほかの原因も考えられますので、十分な診察をすすめています。

ホット・ステーション

自立した生活がリハビリ



たまに連絡して様子をうかがっていますが、回数を重ねるごとに電話のむこうから明るい声が聞こえてきます。DV被害者でうつ病の悦子さん（仮名）の生活ぶりがすいぶんと変わってきました。以前は、朝早く起きられなかったのが、午前6時に起床して、洗濯などにとりかかっています。「寝ていられない気分です」というから、すごい変化です。「人と話すとスーッとします。一人で黙っていると、気分が悪くなるんです」といって、快活に話をしてくれます。

精神疾患の息子が一日に飲む薬の量は相変わらず19錠で「眠剤が減っただけ」といいます。息子にデイケアをすすめても行く気配はありません。彼の居場所を見つけられればと思います。悦子さんは息子ができるだけ昼間起きて夜寝るというふつうの生活パターンになるよう声かけをしており、彼自身もそれを心がけています。病状は波があって、しんどい時は床に臥していますが、しっかり悦子さんは声かけをしています。

悦子さんは週一回、家事援助の訪問介護サービスを利用していますが、「できることは自分でやるようにしています」とヘルパーさんに依存していません。毎週スーパーの安売り日には、魚や冷凍食品を買うようにしています。本日の夕食メニューを聞くと、「びんちょう鮪の刺身とニンニクの芽の炒め物、味噌汁です。魚が安いんですよ！」と弾んだ声。

高齢の母親が、田舎に一人で暮らしているという話をされます。遠くに住む悦子さんのことが心配で、「会いたい」とせがまれて、昨夏、久しぶりに実家へ里帰りしました。遠出は不安感が強まります。「行くときは不安でした」（悦子さん）が、移動支援サービスを利用して、電車にはなんとか乗れました。「2、3日で帰るつもりが、なかなか帰してもらえなかった」という話を聞いて、喜ぶお母さんの顔が浮かんできます。息子もその間、何事もなく一人で生活していました。ただし、「出費が増えました」とこぼします。